病 理 学 演 習

科目責任者：矢　澤　卓　也（病理学）

Ⅰ．前　　文

（当該科目の背景や意義，セールスポイントなど）

３年生以上の学生諸君は，臨床医学を学ぶにつれ，疾患それぞれの病態生理を理解する上で病理組織像の理解が必要不可欠であることを再認識させられていることと思う。それでは病理学総論で学んだ事柄をただ復習すれば，病理組織像が示す所見を読み取れるようになるであろうか。その答えはおそらく否である。病理学演習では，病理組織画像を供覧しながら参加学生同士が疾患についてディスカッションを行うという，双方向性，相互啓発性の高い演習を行うことにより，疾患について深く思考できる能力を養成したいと考えている。

１年生，２年生の学生諸君は，これから始まる疾患の勉強に心を弾ませていることと思う。諸君らには病理学演習を早期に体験することにより，ぜひ，低学年のうちから疾患に対する効率的な勉強の仕方を学んでおいていただきたい。

Ⅱ．受入可能人数

人数は制限しない（１～６年生）

Ⅲ．担当教員

矢　澤　卓　也（病理学・教授）

矢　澤　華　子（病理学・講師）

Ⅳ．学習内容

正常像と対比する形で病理画像をスクリーンで供覧し，疾患についてのディスカッションを行うことにより基礎医学的事項と臨床医学的事項の統合を図り，疾患への理解を深める。

Ⅴ．学修の到達目標

演習はゼミ形式で行われ，自分自身の言葉で他者に説明し，他者から説明を聞くことにより，その時点での疾患に対する自身の理解度が明確になる。また参加者相互および教員との意見交換を通じ，基礎医学各領域で学んだ事柄を有機的に疾患の臨床像の理解に繋げていく能力が養成される。疾患の基礎的側面の理解が不十分なまま積み上げた臨床医学的知識は，いわば砂上の楼閣のようなものであり，この状況を打破，改善することこそが成績向上に繋がる。

授業の開催日時についてはラインやメールにより参加者と協議して決定するが，受講対象者が１～６学年にまたがっているため，通常は多くの受講者が参加できる土曜日の10：00～11：00となる。

Ⅵ．成績評価の方法・基準

出席状況，ディスカッションへの参加状況により，総合的に判断する。

Ⅶ．使用する教材・資料など

通常の講義実習で配布された資料，病理学関係の参考書（病理学の講義実習時に推奨した教科書，参考書については，病理学講座内にも置かれている）。

Ⅷ．質問への対応方法

随時（病理学教員オフィスまで）

Ⅸ．求められる事前学習，事後学習＊（　）内は所要時間の目安

事前学習：事前に通知されるテーマの領域について復習しておき，理解できていない部分を明らかにし，質問したい

五学年

内容を準備しておく。（1時間）

事後学習：ディスカッションを行なった箇所について各自復習する。(30分)

X．コアカリ記号・番号

医学教育モデル・コアカリキュラム（平成28年度改訂版）A－2，A－8

XI．課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

ディスカッションを行うことにより，質問に対する答えはその都度フィードバックされる。

XII．卒業認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

＊◎：最も重点を置くDP　　○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能，種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い，他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療，予防について原理や特徴を含めて理解し，他者に説明することができる。	◎
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け，正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け，患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け，患者やその家族，あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	◎
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	◎
	書籍や種々の資料，情報通信技術〈ICT〉などの利用法を理解し，自らの学修に活用することができる。	◎
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち，専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち，実践することができる。	○
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し，自らの行動に反映させることができる。	○
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け，自らの行動に反映させることができる。	○
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	◎
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	◎